

劉備玄徳の青年時代 — 『三国志』研究ノート<1> —

上谷 浩一

緒言

三国時代研究は新たな学会も発足して活況が続いているが、それにともない人物研究の分野でも、『三国志演義』の影響を払拭し、近年の新たな研究にもとづいて再検討を行うことが必要になっている。本稿はそれを課題として、2006年度から大阪体育大学体育学部で担当している歴史学の講義ノートに、講義では煩雑を避けて言及しなかった関連研究や史料を加筆して再構成したものである。

本学のカリキュラムでの歴史学は、歴史学Ⅰで近現代の日本の社会史や文化史（生活・風俗史）を素材にして歴史学的思考方法の習得を目標とし、歴史学Ⅱはそれを引き継ぎ、外国史を素材にして歴史学的探究方法の習得を目標としている。

本年度の講義では中国の古代政治史、特に後漢末から三国時代を取り上げた。これには筆者の専攻分野であることとともに、事前に実施した受講者アンケートでの希望や後期中等教育で世界史Bの選択率が急速に低下している状況を考慮している。学生の多くが三国時代については、小説やゲーム、アニメを通じてある程度の知識を有している。もちろん虚構と事実が混在したものではあるが、そうした知識を手がかりとして、より深いレベルを出発点として学習を進めていくことが可能になるのである。

指導＝学習方法は正史（中華書局版標点本『三国志』および『後漢書』）をテキストとして適宜、和訳解釈しつつ、当該時代の政治過程を読み解く仮説を紹介して、学生とともにそれを検証していくという形式を採用した。これは史料批判と仮説検証によって歴史叙述がこころみられるという歴史科学の方法の根幹部分を体験させたいと考えるからである。

受講者は、最初は慣れない漢文にとまどいが大きかったようである。しかし講義が進むにしたがって、アニメやゲームなどで親しんだ英雄史観の虚構が崩れ、これまで別個のものと考えていた事項に因果関係が見えてくることを楽しんでくれるようになった。最後に講義をモデルにしたオリジナルの歴史解釈をレポート形式で提出させた。年度末の学生の評価は概ね好評の判定であった。

I 劉備の生没年と郷里

劉備が生まれたのは、西暦 223 年に満 63 歳で死んだことから逆算して、西暦 161 年ということになる。当時の元号では延熹四年、後漢第 11 代桓帝の時代である。

魏蜀呉に分かれて覇を競い合った三人を比較すると、曹操が 155 年に生まれて満 66 歳で死に、孫権が 182 年に生まれて満 71 歳で死んでいるから、劉備がもっとも短命であった。皇帝在位期間も 2 年と短かった。ちなみに、2 代目の劉禅は 40 年で、漢を名のった前漢・後漢・蜀漢を通じて、前漢武帝の 54 年間に次ぐ長期在位の記録を残している。

諱は備、字は玄德で、本貫の地は幽州涿郡の涿県である。涿県は、幽州の中心であった薊（現在の北京）から南西におおよそ 50 km、徒歩なら 1 日半の距離にあり、ちょうど大阪市街地と関西国際空港の位置関係に相当する。涿県は首都洛陽から冀州を縦断して幽州に至る幹線道路上に位置し、人や情報が流れてくる場所であった。そのことが彼の人生にも大きく影響しているようである。

II 劉備の家系

彼は前漢の景帝の子で中山王となった劉勝（靖王）の子孫であるという。近年、豪華な墓が発見された劉勝は前漢武帝の兄にあたり、時代的にはおおよそ西暦前 100 年ごろの人物であるから、劉備とは 350 年くらいへだたっている。日本史に置き換えれば、現在の私たちが徳川家光の子孫を名乗るような感じになる。後漢を建国した劉秀は景帝の子の劉発（定王）の子孫であるから、後漢帝室とは一族である。しかし前漢前期に分かれて以来、両者の血脈は大きく隔たり、また同じような立場の者が他にもたくさんいた。たとえば同時代に荊州に割拠していた劉表や益州に割拠していた劉焉は景帝の子の魯王劉餘（恭王）の子孫であるし、混乱の中で皇帝に推薦された幽州牧の劉虞は後漢光武帝の子の東海王劉彊（恭王）の子孫である。正統性を比較すれば劉虞のほうが遥かに劉備よりも上であるが、彼はもう皇室とは疎遠であるとして、最初から県の役人となって職務に励んだという<『三国志・魏書』巻 8 公孫瓚伝に引く『呉書』>。

劉勝は子供が 120 人あまりおり<『漢書』巻 53>、そのなかで劉備の直接の先祖となる劉貞は、前漢武帝の元狩六年（前 117 年）に涿県の陸城亭侯になった。しかし上納金（酎金）不備事件にまきこまれて早々に侯位を失い、庶民としてそこに住み着いたという。元鼎五年（前 112 年）に武帝は上納金不備で 106 名の侯位を剥奪したが、その中に含まれていたのであろう<『漢書』巻 6 武帝紀>。この時点から考えても約 300 年という年月を経ているから、おそらく若いころの劉備には自分自身が帝室の一員であるという自覚はほとんど無かったであろう。

これに対し、『三国志』は幼少期から劉備は特別な意識を持っていたという話を紹介する。涿県の自宅の垣根の東南の隅に高さ五丈あまり（10m ちかく）の桑の樹が生えており、遠くから見れば馬車につける傘のようであったので、人々から珍しがられていた。桑の樹形を考えると、まっすぐ上に伸びていた枝が途中から噴水のように外に開くと、「翠羽」（緑

の羽飾り)で飾られた皇帝の馬車の傘に似てくるだろう<『続漢書』輿服志上>。その木の下で遊んでいた幼い劉備が「僕は将来、こうした馬車に乗ってやる」と宣言したのは、確かに皇帝になりたいという意味である。

しかし、上記のように、彼は皇帝に手が届く立場にはないのだから、早くから将来を自覚していたとは考えられない。後に劉備が皇帝になってから、あれこれとそれらしい話がこじつけられたのであろう。もし発言が事実であったとしても、子どもらしい大言壮語にすぎない。それを叔父が「一族を滅ぼす気か」と叱りつけたというのも、当時各地で皇帝を自称する反乱が起きていたからである<多田狷介「黄巾の乱前史」『漢魏晋史の研究』汲古書院、1999年を参照>。

III 劉備の父祖

劉備の祖父の劉雄、父の劉弘は代々州郡の役人であった。劉雄は孝廉に選ばれ、官は東郡の范県の令にのぼったとある。孝廉の選出基準は後漢和帝の時に人口 20 万について 1 名とされたから、『続漢書』地理志に記載された順帝期(西暦 140 年)の涿郡 7 県の総口数約 63 万を仮にあてはめると、年間 3 人となる。劉雄はその難関を突破したのであり、県レベルではかなりの家柄であり、学問も一通り身につけた人物であったと考えられる。

しかし、全国でも年間 200 名ほどしかいない孝廉に選ばれながら、県令までで終わったのは、涿県の劉氏が、当時「世吏二千石」と呼ばれた州や郡の内では抜きん出るような名門一族ではなかったということであろう。したがって父の劉弘は、州郡の役人とはいっても、職階を下からじっくりと時間をかけてのぼっていくしかなかったのであり、劉備が幼い時に早世してしまい、特に記録に残せるような官職には届かなかったのである。

IV 劉備の家計状態

劉備の家は、父の死で収入を断たれ、母とともに履を売り蓆を織って生業としたという。歴史小説では母親が蓆を織り、劉備が売り歩く情景を物語るものもあるが、その経営状況の実際はわからない。そのまま素直に貧困生活の苦勞談と読むことも可能である。しかしそれと矛盾するのが、未来の官界での栄達を夢見て 15 歳で母に学問修行に出され、一族の劉徳然や遼西の名門出身である公孫瓚といっしょに、一流の学者であった盧植に入門したという記事である。二つの相反する記事はどのように整合するのだろうか。

まず、母親からの仕送りに加えて、一族内からの援助があった。叔父で劉徳然の父の劉元起が彼に目をかけてくれ、実の子の劉徳然と同等の仕送りを劉備にしてくれた。元起の妻が「各自で一家なのに、なぜそこまでするの」と文句を言ったというのも、その金額が小遣い程度ではなく、本格的に学資や生活の面倒を見てくれたということなのであろう。

ところが、劉備自身の様子を見ると、その生涯に学識を伝えるエピソードが皆無である。青年時代の彼は読書(勉強)にはほとんど興味がなく、犬(『史記』巻 129 貨殖列伝に述べられているドッグレース、要するに賭事が好きだった)と馬(今日で言えばオートバイ

という感じであろう)に興じ、さらには音楽が好きで、おしゃれな服装だったというのである。その生活は苦学生や蓆を売り歩く孝行息子という、歴史小説などに描かれる姿からは程遠い。また、涿県の実家も庭に大きな桑の樹が生えていたというのだから、それなりの設えである。

このように貧困は一面の事実だろうが、彼の真実の全てではない。後漢時代には孝廉(孝行・清廉)に選ばれるために、家庭状況を清貧に装うこともあった。「家無余財」で高名な学者につけて学問に励ませれば「清廉」と評価してもらえると、彼の周囲は期待していたのではないか。

V 盧植への入門

『後漢書』伝 54 盧植伝によれば、師匠の盧植は後漢後期に天下に名声を博していた馬融の弟子で、鄭玄と並ぶ秀才であった。華美な暮らしを好む馬融の下で研鑽精進を好み、謹厳実直な姿勢を崩さなかったという。馬融の門を巣立ち弟子の指導を始めたのは、後漢靈帝の即位(168)後しばらくのことであった。場所は故郷の涿郡ではなく、洛陽に近い緱氏の山中である<『後漢書』伝 63 公孫瓚伝>。そこに住んだのは、執政にあたる外戚竇武に献策するなどして、中央政界とのコネクションを作ること考えていたからであろう。そして建寧年間(168~172年)に博士として政界に登場し、侍中、尚書へと昇進していく。その名声が街道を通ってすぐに幽州にまで伝わり、熹平四年(174年)に劉備らが入門することになったのである。

高名な学者が郷里の青年を弟子にして、その官界進出を支援するというのは他にも例がある。たとえば、後漢中期(和帝の時期)の魯恭は李郃、張皓、陳禪ら益州出身者を育て上げ、彼らは政治刷新運動の中核となっていく<上谷「清流派の系譜」『古代文化』47-1、1995年>。

先の記事のように劉備の不熱心な態度を考えると、おそらく彼は盧植のよい弟子ではなかったのだろう。ただ、盧植は性格が剛毅であったため、九江郡や盧江郡で反乱が起きると郡太守として鎮定に派遣され、ついには中平元年の黄巾の乱では北中郎将として政府軍主力部隊を指揮することになった。こうした点では武人として生きていく劉備と性格が合い通じる部分があったようである。

盧植は攻城兵器を開発して乱の首謀者の張角を追い詰めたが、宦官の讒言で罷免された。その後、尚書に復帰するが、董卓が実権を握ると対立して免官され、上谷郡に隠棲した。冀州牧場の袁紹から軍師に招かれ、死後には曹操から「名は全国にとどろき、学問では大学者である」と賞賛されているから、その実務能力や学識への評価の高さがうかがわれる。

こうした政治に意欲を持ち軍事でも活躍する知識人という個性は、後に劉備の腹心となる諸葛亮と非常に共通している。盧植への入門で劉備が得た最大のものは、こうした知識人といかに接したらよいのかを、直に経験できたということではないか。彼がもし、武力集団の頭目という人生経験しか持たなかったら、後に徐庶を幕僚に招き、その紹介で知っ

た諸葛亮の心を「三顧の礼」で鮮やかにとらえるといった芸当は困難であろう。「三顧の礼」の原型は盧植の弟子時代に身につけたものだと考えたい。

VI 劉備と党錮事件

劉備が学問に打ち込まなかった理由としては、かれの個人的性向に加えて、社会情勢とのかかわりを考えることもできるだろう。

当時の中央政府では靈帝が宦官を重用し、それを批判する儒家官僚（儒教を身につけて官界に進出し、政治刷新を主張した官僚たち）と、その支持勢力であった学生たちを厳しく弾圧していた。建寧二年（169年）の第二次党錮事件では党人と呼ばれた李膺らが処刑され、同時に首都洛陽の太学生たちがその冠として敬愛した賈彪は禁錮となり、郭泰は郷里に逃げ帰った。さらに熹平元年（171年）には太学生の一斉検挙があり、千人あまりが逮捕された。劉備が入門した翌年の同五年には、永昌郡の太守であった曹鸞が党人の再登用を提案したことが逆に靈帝を怒らせてしまい、党人の一族や門下生までが罷免され禁錮処分となった。学問を身につけることが危険な時代だったのである。縵氏にいた劉備は身近でそれを見聞したはずであり、彼の放蕩は、学問での立身の夢が破れた挫折感のはけ口であった可能性を指摘したい。

同じ挫折は同窓の公孫瓚にも起きたはずであるが、彼は「世々二千石」の名門出身で太守の娘を妻としており、盧植への入門も派遣留学のような形であったから、郷里に戻ると孝廉に選ばれ、遼東属国長史から涿県の県令へと、とんとん拍子の出世を重ねることができた。さらに異民族（烏丸族）との攻防や漁陽郡での張純の乱の鎮圧で活躍し、幽州の治安維持を統括する中郎将となった<『三国志・魏書』巻8公孫瓚伝>。この中郎将就任は靈帝期改革と関連する重要な問題を含むが、それは別稿にて述べたい。

VII 劉備の相貌

青年となった劉備は身長が「七尺五寸」と書かれているから、後漢の1尺=約24cmで計算すれば、180cmくらいの長身であった。指先が膝に届くと表現されるくらい腕が長かったから、おそらく足（ひざ下）も長く、スタイルがよかったのであろう。また耳が大きく、自分で耳を見ることができたという。顔立ちは記録に無いが、人生の多くの部分を戦場で過ごすから、30代のころには相応の迫力が備わっていたはずである。

ちなみに、劉備の側近の武人たちで身長が正史『三国志』に明記されているのは趙雲（8尺）だけで、2m近い大男ということになる。『三国志演義』では関羽（9尺）と張飛（8尺）がさらに大男になっているが、正史には体格に関する記事や描写がまったくない。もしかすると、「桃園の義兄弟」と俗称される3人の中では、イメージ的には髭面の大男2人の間で小柄に描かれがちな劉備が、もっとも長身であったのかもしれない。また、諸葛亮も身長は8尺であったと『三国志』は記録している。

性格については、口数が少なく、謙虚で、喜怒はあまり表に出さなかったという。また

豪俠たちとさかんに交際し、「少年」（社会のアウトローたち）たちに人気があったというから、親分肌であったのだろう。

VIII 劉備の立志と黄巾の乱

劉備がいつ郷里に戻ったのかは明らかではない。『三国志・蜀書』巻6 関羽伝には、劉備が涿県で募兵した時に関羽・張飛が合流したとある。当時の劉備はまったくの無位無官無禄であり、子分の「少年」たちへの手当の捻出は厳しかったであろう。関羽・張飛と寝食をともにしたという記事も、当時の経済的余裕の無さを物語っていると読み解くべきなのかもしれない。

しかし異民族の侵入や反乱で幽州の治安が悪化し、商人たちは往來の護衛役として武力を必要としていた。中山国出身の張世平、蘇雙らは資本が何千金もある大商人であったが、馬の取引で涿郡を通りかかったときに劉備と出会い、彼の人物を見込んで多くの資金を提供してくれた。おかげで仲間を増やすことができたという。これも涿郡が交通の要衝であればこそその幸運であった。

靈帝末、中平元年（184年）に黄巾の乱が起きると、州郡は義勇兵を募集した。劉備も仲間を率いて参加し、校尉の鄒靖にしたがって黄巾の賊を討って手柄を上げたとある。『後漢書』伝61 皇甫嵩伝には五校尉の部隊（中央の近衛部隊）や三河の騎士（洛陽周辺の軍団）に加え、民間からも「精勇」な者を募集して鎮圧を行ったとあるから、劉備はその「精勇」な者に該当するのであろう。しかし『典略』には「張純の反乱（187年）で青州に出動命令が下り、従事が兵を率いて討ちに来た。ちょうど（州境の）平原郡を通りかかったので、劉備の武勇を見込んでいた郡人の劉子平が劉備のことを従事に推薦してくれ、同行させてもらえた。しかし戦いで大怪我をして、危ないところを助かった」という話が書かれている。幽州から南の冀州、青州にかけての地域で反乱鎮圧舞台の募集があれば、すすんで参加していたのであろう。功績を認められて官職を得なければ、配下の民間武力集団を維持していけなかったからである。

黄巾の乱か張純の反乱か、どちらの鎮圧での功績が認められたのかは不明だが、劉備は中山国の安喜県の尉（警察署長）に任命された。しかし彼はそれに満足できなかったようである。安喜県は中山国の中心である盧奴にも近く、郷里の涿県にも100 kmあまりの場所であるが、黄巾の最終拠点となった下曲陽からも40 kmしか離れておらず、当時は混乱や荒廃で税収が期待できない場所だったのであろう。恩賞の追加があるといううわさがあり、ちょうど督郵（巡察官）が来たので、彼は異動辞令を持ってきてくれたのだと期待して挨拶に行った。ところが相手にされず、失望して怒った劉備はなぐりこみをかけて督郵に暴行し、官印を捨てて（辞職）逃亡することになった。「亡命」とあるように、犯罪者として逃亡したのである。将来の可能性をすべて閉ざしてしまうような軽率な行為であった。

こうした行動を見ると、普段、表面的には大人物のように振舞っているが、内心は非常に動揺しやすいというのが劉備の本当の性格であったようである。

IX 劉備と公孫瓚

そのころ、都の洛陽では靈帝と外戚で大將軍の何進が西園軍と呼ばれる新しい常備軍の創建を進めていた。上谷「後漢中平元年の政變の構図」『東方学』98、1999年。売官や増税などなりふりかまわず資金を集め、皇帝直属の強力な武力を洛陽に置いて天下を威圧しようというのである。そこで何進は都尉の毋丘毅に楊州の丹楊郡で兵士の募集をさせることにした。丹楊郡と指定したのは、おそらく南の山中の山越と呼ばれる原住民を狩り集めようとしたのであり、劉備が同行したというのは仲間を率いてそれに応募したという意味であろう。靈帝は商人を官僚に抜擢するなど実力主義の人事を行っており。上谷「鴻都門学考」『東洋史研究』63-2、2004年。西園軍も武芸が優れていれば犯罪者を受け入れたのだろう。そして徐州の下邳で反乱勢力と遭遇し戦いとなった。「力戦した」というのは実力を証明しないとイケないからで、それは認められたが、今度は渤海湾に面する青州北海国の下密県の丞（副長官）に任命されてしまった。

青州は後に曹操に降伏して活躍する精強な青州黄巾の大集団がおり、赴任するには危険な地域であった。それを辞職してもすぐに平原郡の高唐県の尉（治安責任者）、そして同じ県の令（長官）に昇進したのは、彼の実力が認められていたということなのだろうが、同じ青州内での異動であった。おそらく最後は青州黄巾軍に打破られて、郷里の幽州の公孫瓚のもとに命からがら落ちのびることになったのであろう。このころ劉備は30歳を目前にしていた。

公孫瓚とは盧植の弟子仲間と親しく、兄弟分の契りを交わしていた。そこで公孫瓚は逃げてきた劉備を迎え入れ、別部司馬にしてくれた。

司馬そのものは將軍の下で軍事部門を統括する要職であるが、別部司馬は少し様子が違う。孫権の父の孫堅が黄巾の乱で活躍した時に車騎將軍の朱儁の推挙で就任しているが、同時期に張超も就任しており。後漢書卷80下文苑伝。劉備が平原国の相になった時に関羽と張飛を同時に任命し。『三国志・蜀書』卷6関羽伝。曹操も挙兵した時に側近の夏侯淵や「少年」1000余人を集めた従弟の曹仁を任用している。『三国志・魏書』卷9夏侯淵伝・曹仁伝。このように非正規で臨時的な任用という性格が強かった。また呉に就任者が多いが、『三国志・呉書』の列伝を見ると、黄蓋や韓當、蔣欽、潘璋、周泰、陳武、董襲、凌統ら武勇で鳴らした前線指揮官ばかりである。劉備に対する評価も同じようなものだったのであろう。実際に与えられた任務も青州刺史の田楷とともに冀州牧の袁紹を防ぐというものであった。期待にこたえて戦功をあげたので、公孫瓚は劉備を臨時に青州の平原県の令とし、後に平原国の相（郡太守に相当）を兼任させてくれた。

その時のエピソードとして、郡民の劉平が平素から劉備を軽んじその下になるのを恥じて子分に殺させようとしたが、子分はためらい、白状して逃げたという。『三国志』の編纂者である陳寿は、劉備を「心の広さや志の強さ、そして人物を見分け起用していったことには前漢の高祖を髣髴とさせるものがあり、英雄の器であった」と総括したので、この記

事も人の心をつかんだという逸話として用いている。しかし劉平の側から見れば、劉備は下密県や高唐県から逃げ出していった人物である。しかも隣の幽州にいる公孫瓚がどさくさの中で発令した人事であり、そのプロフィールも関羽や張飛ら無頼集団の頭目というのであるから、怪しさを覚えるのが当然であつたろう。

おわりに

ここまでですでに人生の半ばを迎え、青年期を終えようとする劉備であつたが、劉氏であるとはいっても特別待遇に結びつくほどのものではなく、その経歴も中国各地に登場していた数多くの民間武力集団の頭目の一人にすぎなかつた。

しかし、盧植への入門は大きな意味を持っていた。従来の研究では、このことは公孫瓚との出会いのきっかけとして以外は、ほとんど注目されていないが、知識人との交流の経験は彼が群雄の中から抜きん出ていく上で大きな武器になつたであろう。

稿を改めて、劉備の後半生の事情を探っていきたい。

『三国志・蜀書』卷2 劉先主伝 原文及び斐注（丸数字）

—【】の数字は、本文の各章に対応している—

【I】先主姓劉，諱備，字玄德，【II】涿郡涿縣人，【III】漢景帝子中山靖王勝之後也。勝子貞，元狩六年封涿縣陸城亭侯。坐酎金失侯，因家焉①。【IV】先主祖雄，父弘，世仕州郡。雄舉孝廉，官至東郡范令。

①典略曰：備本臨邑侯枝屬也。

【V】主少孤，與母販履織席為業，舍東南角籬上有桑樹生高五丈餘，遙望見童童如小車蓋，往來者皆怪此樹非凡，或謂當出貴人②。先主少時，與宗中諸小兒於樹下戲，言「吾必當乘此羽葆蓋車」。叔父子敬謂曰「汝勿妄語，滅吾門也」。年十五，母使行學，與同宗劉德然、遼西公孫瓚俱事九江太守同郡盧植。德然父元起常資給先主，與德然等。元起妻曰「各自一家，何能常爾邪」、元起曰「吾宗中有此兒，非常人也」。而瓚深與先主相友。瓚年長，先主以兄事之。【VI】【VII】先主不甚樂讀書，喜狗馬、音樂、美衣服。【VIII】身長七尺五寸，垂手下膝，顧自見其耳。少語言，善下人，喜怒不形於色。好交結豪俠，年少爭附之。【IX】中山大商張世平、蘇雙等貲累千金，販馬周旋於涿郡，見而異之，乃多與之金財。先主由是得用合徒衆。

②漢晉春秋曰：涿人李定云「此家必出貴人」。

靈帝末，黃巾起，州郡各舉義兵，先主率其屬從校尉鄒靖討黃巾賊有功，除安喜尉③。督郵以公事到縣，先主求謁，不通，直入縛督郵，杖二百，解綬繫其頸著馬柳，（五葬反）棄官亡命。④頃之，大將軍何進遣都尉毋丘毅詣丹楊募兵，先主與俱行，至下邳遇賊，力戰有功，除為下密丞。復去官。後為高唐尉，遷為令⑤。為賊所破，往奔中郎將公孫瓚，瓚表為別部司馬，使與青州刺史田楷以拒冀州牧袁紹。數有戰功，試守平原令，後領平原相。郡民劉平素輕先主，恥為之下，使客刺之。客不忍刺，語之而去。其得人心如此⑥。

③典略曰：平原劉子平知備有武勇，時張純反叛，青州被詔，遣從事將兵討純，過平原，子平薦備於從事，遂與相隨，遇賊於野，備中創陽死，賊去後，故人以車載之，得免。後以軍功，為中山安喜尉。

④典略曰：其後州郡被詔書，其有軍功為長吏者，當沙汰之，備疑在遣中。督郵至縣，當遣備，備素知之。聞督郵在傳舍，備欲求見督郵，督郵稱疾不肯見備，備恨之，因還治，將吏卒更詣傳舍，突入門，言「我被府君密教收督郵」。遂就床縛之，將出到界，自解其綬以繫督郵頸，縛之著樹，鞭杖百餘下，欲殺之。督郵求哀，乃釋去之。

⑤英雄記云：靈帝末年，備嘗在京師，後與曹公俱還沛國，募召合眾。會靈帝崩，天下大亂，備亦起軍從討董卓。

⑥魏書曰：劉平結客刺備，備不知而待客甚厚，客以狀語之而去。是時人民饑饉，屯聚鈔暴。備外禦寇難，內豐財施，士之下者，必與同席而坐，同簋而食，無所簡擇。眾多歸焉。